

〈研究ノート〉

マルクス・ヴォルフとドイツ現代史

——旧東独スパイ・リーダーの訃報に接して——

近 藤 潤 三

1. ヴォルフへの関心

本号に掲載したDDRの政治犯に関する論稿を書き終えて一月あまり経ったころ、ドイツからのある報道に接した。それは2006年11月9日の新聞記事である。ドイツで11月9日と言えば、真っ先に浮かぶのは、ドイツ統一を決定づけたベルリンの壁が1989年に崩壊した記念日であることであろう。さらにドイツ現代史に関心のある者にとっては、1938年のその日に水晶の夜と呼ばれるナチが仕組んだ Pogrom が発生したことや、1918年の同日に第一次世界大戦敗北を受けてシャイデマンが皇帝ヴィルヘルム2世の退位と共和国の成立を告げたことが思い出される。このようなドイツ史上の大事件に比べれば、その記事が伝えるのは限りなく小さな出来事である。その出来事というのは、マルクス・ヴォルフという一人の男が他界したことである。

わが国ではマルクス・ヴォルフといってもほとんど知る人はいないであろう。しかし、ドイツでは中高年の世代では比較的名の知られた人物であり、名前を聞いただけで畏怖する人も存在している。その理由は、彼が多年に亙り東ドイツの崩壊とともに消滅した国家保安省（通称シュタージ）の幹部だからである。東ドイツの独裁政党だった社会主義統一党（SED）の「盾と剣」と自己規定していたシュタージは、別名「ミールケ帝国」とも呼ばれたように、長官を長く務めたE.ミールケの王国だったといわれるが、それを実質的に支えていた最高幹部の一人がM.ヴォルフだった。彼は対外諜報組織のトップとして手腕を発揮したばかりでなく、多年に亙り顔写真すら知られていない闇の存在だったので、西側では「顔のない男」と命名されてミールケ以上に恐怖の対

象になっていたのである。東ドイツ市民の挙動を監視し自由を封殺していたシュタージは、その名前だけで圧迫感を引き起こすといえるが、ヴォルフの場合にはそれに加えて姿の見えない不気味さが付きまとったのである。

ヴォルフが守ろうとした東ドイツはベルリンの壁を支えにして存続していたが、それが崩壊したのと同じ日にヴォルフが死去したのはなにか因縁めいたものを感じさせる。分断されたドイツを実感できない若い世代には彼は無縁な存在だとしても、東西に分かたれた二つのドイツで暮らしてきた中高年の人々にとっては彼は同時代人であり、東ドイツ消滅とともに歴史の舞台から退いたとしても、なお生々しい記憶と重なる人物の一人といえよう。それだけではない。C.クラウゼンが伝えるところによれば、ヴォルフ自身が「DDRで悪とされるすべてのことに私は責任を負わされるだろう」と語ったように、ホーネッカー（1912-1994年）、ミールケ（1907-2000年）、ミッターク（1926-1994年）などがこの世を去り、忘却の中に沈んでいった後では、生き残った者として贖罪の羊の役割を引き受けなければならないことを彼は自覚していたといわれる。その意味で、ヴォルフまでが鬼籍に入ったことは、分断されたドイツが過去へと遠ざかっていく里程標の一つのように映るのである。

ともあれ、ドイツのかなりの市民の記憶に残る人物であるところから、ヴォルフの死に際しては『フランクフルター・アルゲマイネ』紙をはじめとする全国紙はもとより、主要な地方紙にも数多くの記事と論評が載せられた。また、若干の新聞では追悼文や簡単な略伝もいくつか掲載されたので、以下ではそれらを参照しながらマークス・ヴォルフという人物の足跡を振り返り、彼とドイツ現代史との関わりを考えてみたい。

2. ソ連亡命ドイツ人家族の一人として

「顔のない男」という別称をもじった「多くの顔をもつ男」という見出しの論評で『ツァイト』紙上でC.ザイルスはヴォルフの生涯を論じているが、そのなかで彼は、「マークス・ヴォルフの人生はまた極めてドイツ的な歴史である」

と記している。その指摘のとおり、ヴォルフの生涯はドイツ現代史の展開を見事なまでに映し出しており、彼の人生には現代ドイツ史が凝縮しているといっても過言ではない。ヴォルフの人生はユダヤ系の家庭に生まれたところから始まるが、ユダヤ系である点に既に彼の顔の一つがある。彼が出生したのは1923年1月19日であり、フランス・ベルギー軍がルール地方を占領し、ドイツ政府が消極的抵抗を行う直前のドイツの苦難の時期だった。この年の11月にはヒトラーがミュンヘン一揆を企てて失敗している。

ヴォルフが生まれたのは今日のバーデン＝ヴュルテンベルク州のヘヒンゲンという町である。ヘヒンゲンは州都シュトゥットガルトから南に50キロほど離れた何の変哲もない静かな田舎町であるが、一つだけ注目に値することがある。西ドイツにはシュタージに対抗する諜報機関としてゲーレン機関を母体とする連邦情報庁（BND）が存在するが、内相時代のゲンシャーの腹心として1972年からその長官を務めたK.キンケル（1936年出生）がやはりヘヒンゲン生まれであることである。これは単なる偶然の一致にすぎないにしても、対峙するスパイ組織のリーダーが同じ田舎町の出身というのはやはり不思議な縁というほかはない。キンケルは後にゲンシャーの後任として統一後のドイツの外相になり、また確信的な経済リベラルとして鳴らしたラムスドルフの後を受け、FDP党首としてコール政権を支えた政治家である。

ヴォルフの父の職業は医者であり、文筆もかなりのレベルに達していたというが、ここで重要なのは何よりも彼が妻とともに熱心なドイツ共産党員だった事実である。そのため、ヒトラーが政権を掌握した1933年に危険を避けるために家族をつれて最初はスイスに、次いでフランスに逃れなければならず、1934年には一家揃ってソ連に亡命した。だから息子マークスが成長したのはスターリン治下のソ連であり、彼は徹底した共産主義教育を受けることになったのである。1934年から1937年まで彼は亡命ドイツ人が開設したモスクワのカーン・リープクネヒト学校で学び、その間の1936年にソ連国籍を取得した。独ソ戦が始まる直前の1940年に彼は航空機製造技術を学ぶために大学に入学し、戦火を避けて大学が移転したのに伴い、モスクワからアルマータに移った。1942年に

はソ連を拠点にしていたドイツ共産党（KPD）に入党した。またその頃短期間コミンテルンの学校で学んだ後、1943年から45年まで彼はモスクワのドイツ人民放送で編集、解説を担当し、対独プロパガンダの第一線で働いた。そして戦争が終結するとスターリンに忠実なウルブリヒト・グループの一員としてドイツに戻り、1945年から「二重の建国」の年である1949年までベルリン・ラジオ放送で再びプロパガンダに従事し、ニュースの報道を担当した。この時の偽名はミヒヤエル・シュトルムといい、彼が主に関わったのはナチ戦犯を裁いたニュルンベルク裁判だった。1946年にSPDとKPDの強制統合によって社会主義統一党（SED）が創設されたとき、彼が真っ先に黨員になったのは指摘するまでもないであろう。

ドイツ分断が確定的になった1949年にヴォルフはモスクワに呼び戻され、ソ連国籍でありながら、在モスクワDDRミッションの一等参事官に就任した。そして翌年あるいは翌々年にソ連国籍を放棄し、DDR国籍を取得した。こうして彼は再びドイツ人に戻った。だからヴォルフには、共産主義を背骨にしつつ、ソ連人とドイツ人という二重の顔があるといえる。またこれ以後、彼は冷徹な実務家としての才覚をあらわし、出世の階段を駆け上がって行く。というのは、西ドイツに対抗してDDRの社会主義建設を進めるためにはイデオロギーの忠実では足りず、実務感覚のある合理的な設計者が必要とされたからである。

3. DDRスパイのリーダーへ

1951年に東ドイツ人としてモスクワから東ベルリンに戻ったヴォルフについては二説ある。一つは同年に経済学研究所の副主任に就任したというものであり、もう一つはソ連の情報機関であるAPNで第3部門の副主任になったというものである。APNは1953年に国家保安省に吸収され、ヴォルフが同年から対外情報活動を担当するその第15部門（HA XV）の責任者になったのは確実だから、後者の説が納得しやすいように思われる。1956年に同部門は偵察局に改

組された。同局の任務は対外諜報すなわちスパイ活動である。ヴォルフのスパイ戦略の要諦は、第一段階で西側で信用を築いて政治的中枢に潜入し、影響力のある地位を手に入れること、これに成功した後の第二段階で本格的なスパイ活動を実行することにあった。この戦略に基づきヴォルフの指揮下で活動したスパイの数は4千人に達するといわれ、西側の専門家から彼は「チェス選手のような精密さ」で彼らを操縦したと評されている。

国家保安省（シュタージ）は軍隊を模した階級制度を導入していたが、1954年にヴォルフは31歳の若さで少将に任じられ、1965年には中将に昇進した。また1956年には国家保安省の副長官に就任している。さらに1969年に祖国功労勲章を授与されたほか、1971年にはソ連内務省から赤星勲章を授けられた。

このようにヴォルフはDDRで栄達を極め、ミールケとともにシュタージを代表する存在になった。そうしたヴォルフにアメリカの情報機関は1950年代から将来シュタージの中核になる人物と見てマークしていたといわれる。それにもかかわらず彼が「顔のない男」と呼ばれたのは、文字通り西側には彼の顔写真がなく、どのような人物かの同定ができなかったからだった。彼の顔が確認されたのは1978年のストックホルム訪問の際に写真撮影されてからだといわれ、真偽のほどは不明だが、それ以前には1959年に撮られた一枚の写真があるだけだったと伝えられている。それだけに西側ではヴォルフは伝説的な存在であり、スパイという得体の知れない集団を闇の奥から操る不気味な人物と見做されたが、その彼が「ほとんど神格的な存在」にまで昇格し、「世界の対外情報活動の最も成功したボス」という評価を確立したのは、1974年に発覚し、西ドイツを揺るがしたギョーム事件によってだった。当時、西ドイツ首相W.ブラントは「より多くの民主主義を」の標語で68年世代に属した若者からも信頼を集めていた。また、東方政策により東西関係を安定させ、緊張緩和への貢献でノーベル賞を授与されて政権基盤を盤石のものにしているように見えた。しかし、突如として持ち上がったギョーム事件で彼は大きく躓き、退陣に追い込まれる結果になったのである。事件の中心に位置したG.ギョームはブラントの側近中の側近として首相府で私設秘書として勤務していた人物だが、実はヴォ

ルフが西ドイツに送り込んだDDRのスパイの一人だった。彼はヴォルフの戦略どおりにブランドに巧妙に取り入って首相府にまで潜り込み、西ドイツの政治の中枢から機密情報をDDRに送っていたのである。冷戦下の東西ドイツで多数のスパイが暗躍していることは周知の事実だったとしても、首相の身邊にまでスパイが接近していただけに事件が内外に与えた衝撃は大きかった。この事実は裏返せば東ドイツ諜報機関の成果を意味したから、その声価が一気に高まったのは当然であろう。こうして事件の全体はヴォルフの功績とされて彼には同年にカール・マルクス勲章が授与された。同時にヴォルフは伝説化され、西側からはそれまでも増して恐怖の目で見られるようになったのである。

もちろん、ヴォルフのキャリアは輝かしい成功談だけで飾られていたのではない。1979年には偵察局に勤務していた中尉格のヴェルナー・シュティラーが西ドイツに寝返り、大量の機密書類を携えてベルリン市内を東から西に逃亡したからである。彼が裏切ったその日のうちに30人以上のスパイに向けて急ぎ引き上げるようにとの警告がシュタージ本部から発せられたが、結局17人が西側で逮捕された。この事件は東ドイツ・スパイ界の最大の汚点であり、ヴォルフの面目は著しく傷つく結果になった。これと前後して彼自身が不覚にも写真撮影されたことと併せ、彼の成功の裏には失敗も隠されていたのである。

4. 転身の試みと挫折

冷戦期における二つのドイツの緊張に満ちた関係は諜報戦という側面を抜きには語れないが、その意味では「スパイの世界の黒幕」といわれるヴォルフはドイツ現代史の主要な登場人物の一人だと言って差し支えないであろう。むしろ、より正確には、歴史の表舞台ではなく、舞台裏の主役の一人というべきかもしれない。けれども、1986年に彼は突然その舞台裏から退場する。同年5月に休職を願い出て第一線から離脱し、11月には辞職が認められてシュタージを去ったからである。当時、既に60歳を越えていたから、彼の引退は必ずしも唐突とはいえないし、体力の限界や後進に道を譲るなどの様々な理由が当然考え

られよう。けれども、30年以上に亘って率いてきた諜報機関から彼が身をひいた本当の理由は、ソ連で若いゴルバチョフが登場しペレストロイカが始まったのに高齢化し硬直した指導者を戴くDDRではその動きがなく、目敏い彼がDDRの将来を見限ったからだと推測されている。そうした推測がなされるのは、辞職後の彼が年金生活者の静穏な暮らしに埋没せず、むしろ文筆を通じて拘束されない立場から発言を行うようになったからである。その意味で、DDRの経済停滞と政治的硬直が顕在化した時期にヴォルフがシュタージから身をひいたのは偶然ではなかったと考えられるのである。

彼の最初の著作『トロイカ』が東ドイツで出版されたのはベルリンの壁が崩壊した1989年のことである。「上映されなかった映画の歴史」という副題をもつこの書は、彼の兄の構想を下敷きにしているといわれ、ヴォルフ家を含む三つの家族の歴史を扱っているが、の中で彼は慎重な言い回しでゴルバチョフのペレストロイカを擁護する姿勢を示した。また反体制の歌手W.ビアマンを国外追放したDDR指導部の措置を批判するとともに、より開かれた政治的議論を求めた。この著作は二つの点で世間を驚かせた。一つは、依然としてSED独裁が続き、言論の自由が許されていない東ドイツで体制に批判的な著作が公刊されたからである。もう一つは、その著者が少し前まで東ドイツのスパイのリーダーだった人物であり、DDR指導部と一体で抑圧体制の担い手だと思われていたヴォルフだったことである。この出版によりヴォルフは一転してDDRの改革運動に好意的な著名人の一人に数えられるようになり、また彼自身も改革派の集會に姿を見せるようになった。オーストリアとハンガリー間の国境開放を起点にDDR市民の国外脱出が加速し、民主化を要求する運動が勢いを増して政情が騒然となった1989年9月にヴォルフは西ドイツの主要紙『ジュートドイッチェ・ツァイトゥンク』のインタビューに応じ、DDRの政治的欠陥については自分にも共同責任があることを認め、改革運動へのシンパシーを表明した。これに続き、10月には集會に参加するとともに、SEDを内部から改革するグループの助言者として活動する意向を明らかにした。けれども亡命ドイツ人家族の一員としてソ連で徹底した共産主義教育を受けただけでな

く、長くDDRの権力中枢にいてホーネッカーなどと歩みを共にしてきたヴォルフの転身には所詮大きな限界があった。確かに彼は一時的には「東ドイツのゴルバチョフ」と見做され、SED改革派の希望の星の一つに数えられた。またその流れで50万人以上の市民が参加して11月4日に東ベルリンのアレキサンダー・プラッツで開かれた大集会で演説台にも立つに至った。しかし彼が改革の必要を唱える一方で、シュタージの活動の正当性を強調し、シュタージの職員と協力者をスケープゴートにしないように懇請したとき、激しい罵声とブーイングが巻き起こり、彼が既に改革運動から取り残されていることが明白になった。ザイルスが指摘するように、この時にすでにヴォルフは「過去の人」になっていたのであり、「SED改革政治家という第二の経歴の計画は早くも結末を迎えた」といえよう。彼がDDR改革の必要を説き、改革派と足並みをそろえているように見えたとしても、それは東の間に消えうせた幻影だったのであり、彼が主観的には改革派の方に軸足を移したつもりでも、DDRの根底的な変革を求める時代のうねりに一瞬のうちに追い越されたのである。

そればかりではない。ドイツ統一が近づくとスパイ活動の容疑で逮捕される恐れが生じ、実際に1990年10月にヴォルフに逮捕状が出された。そのため、統一直前にヴォルフはオーストリアを經由して成長期を過ごしたモスクワに逃亡しなければならなかった。しかしソ連も安住の地ではなく、翌年8月にソ連でクーデタが発生し、ソ連崩壊が一気に加速すると、9月に再びオーストリアに難を逃れた。そして同国で政治亡命を申請したものの即座に却下されて行き場を失った。その結果、覚悟を固めて自主的にドイツに戻り、9月24日に国境で官憲に出頭した。こうして1年前の改革派の人物という東の間の夢が完全に消えただけでなく、統一を果たしたばかりのドイツで刑事被告人としての新たな経歴が始まるのである。

5. ドイツ統一後のヴォルフ

ドイツでヴォルフはしばらく拘留所に収監された後、保釈された。逮捕容疑は反逆罪だったが、取り調べで彼は以前の同僚・部下の行動については一言も漏らさなかったという。デュッセルドルフ上級地方裁判所は1993年に有罪判決を下し、反逆と贈賄の罪でヴォルフを6年の自由刑に処すとしたが、刑は執行されなかった。それは消滅したDDRのスパイたちが国家の命令でDDRの法律に基づいて行動したところから、彼らの行為を犯罪として処罰できるか否かについて連邦憲法裁判所がまだ判断を示していなかったためである。1995年5月に連邦憲法裁判所はこの問題についての決定を行った。それは、DDR市民は以前のスパイ活動について限られた範囲でのみ訴追されうるとするものだった。トップであるヴォルフが直接手を下すことはなかったにしても、DDRを裏切った者の殺害や敵対的人物の拉致・監禁などの事件はいくつも発生し、それらに彼が関与していたのは確実だった。けれども、この決定を受けて再審の手続きがとられた結果、同年に6年の自由刑の判決は取り消されて、ヴォルフは自由の身になったのである。

とはいえ、その自由も長くは続かなかった。1996年には同じデュッセルドルフ上級地方裁判所で傷害と監禁の容疑による裁判が始まり、再び刑事被告人の席に立たされたからである。判決は1997年にあったが、4件の監禁、傷害、脅迫に関わったと認定され、3年の執行猶予つきで2年の自由刑を科すという内容だった。また翌98年にはSPDの政治家P.G.フレミツヒに対するスパイ行為の裁判で証言を拒否したために3日間の強制拘禁に処された。

一方、著作活動の面では、1997年に『秘密の戦争の渦中のスパイのボス』というタイトルの回想録を公刊し（FAZ書評）、2002年には『友人たちは死なず』という著作を発表した。東ドイツ消滅後、シュタージのかつての幹部たちが一様に口を閉ざしていたのと違い、これらの著作で彼は自分の過去とDDR体制を巡る議論に積極的に加わり、一部で非を認めながらも基本的にスパイのリーダーとしての正当性を主張した。また2003年12月にはテレビ局MDRがヴォルフ

フの生涯を主題にした2部編成のドキュメント番組を放送したが、これに彼は出演し、かつての同僚と部下、敵対者、証言者などを前にして「異例のオープンさ」で持論を展開した。この番組では東方政策の立役者のエゴン・バル、最後の東ドイツ駐在ソ連大使だったヴァレンティン・ファリンをはじめ、西ドイツの連邦情報庁に潜入したトップ・スパイとして知られるガブリエレ・ガスト、NATO本部に潜り込んだライナー・ルップなど錚々たる顔触れが登場したのに照らしても、ヴォルフの大作振りが窺えよう。他方、彼は自説を広める意図もあり、各地で講演活動などを行った。その際、当然ながらスパイのリーダーとしての活動に対する批判を浴びることもあったが、その一方で、DDRを擁護する人々からは共感や賛辞が寄せられることも多かったという。このように東ドイツが消滅してからも著作や講演などによりヴォルフは「メディアの減退しない関心」を引き付けつづけた。シュタージの最高幹部として栄達を極め、スパイのボスとして恐怖的になった過去を引きずりながら、こうしてヴォルフは自らが守ろうとしたベルリンの壁の崩壊記念日にこの世を去ったのである。

6. ヴォルフとドイツ現代史

以上でマークス・ヴォルフの生涯を4期に区切り、簡単に辿ってきた。それを振り返れば、歴史の波に翻弄された数奇な生涯として片付けることも可能であろう。しかし、本稿の目的はエレジーを語ることにあるのではない。彼の人生をここでは便宜上4つの時期に区分してみたが、その理由はマークス・ヴォルフという一人の人間をドイツ現代史の展開と重ね合わせ、生きられた現代史を把握するためだった。それではドイツ現代史を光源にした場合、どのような彼の顔が浮かび上がってくるのだろうか。次にこの点を考えてみよう。

第一に注目すべきは、彼がユダヤ系の家庭に生まれ、父親が熱心な共産党員だったことである。もし彼がユダヤ系の生まれでなかったなら、家族とともに国外に亡命することはなかったであろうし、父親が共産党員でなかったならば、

向かった先はソ連ではなかったかもしれない。ヴォルフ家を含め、当時のドイツで暮らすユダヤ系ドイツ市民は少なくなかったし、ワイマール共和国最後の選挙からも明らかなように、共産党の勢力も小さくなかった。その意味では、国民全体から見れば少数とはいえ、マークス・ヴォルフがソ連に落ち着いたのはけっして例外的なケースとはいえないであろう。いずれにしても確かなのは、ナチスが権力を掌握しなければユダヤ系であるヴォルフ家がドイツを立ち去ることはなかっただろうし、共産党が群小政党の一つにすぎなかったなら、ソ連を亡命先に選ぶドイツ人はほとんど存在しなかっただろうということである。

やがて始まった大粛清の嵐は少年ヴォルフの上を通り過ぎたが、彼の身近にいたドイツ人亡命者たちがどのような運命を辿ったかは分からない。当時モスクワに亡命中の「闇の男」野坂参三が延命のために同志を密告したように、亡命ドイツ共産党員が大粛清の犠牲になり、さらに独ソ不可侵条約の締結に伴いナチの手に引き渡されたことを考えれば、ヴォルフの身边でもかなりの波乱があったことは推測に難くない。ヴォルフはソ連で亡命ドイツ人の学校に通ったものの、スターリン統治下で彼は徹底した共産主義教育を受けて成長した。そうした教育はドイツではありえなかったから、彼は母国の大多数の同世代人とは異なる道に進んだことになる。そのことは彼が若くしてソ連国籍を取得してソ連人になったことにも表れている。ソ連にはヴォルガ・ドイツ人のようなドイツ系少数民族が居住しており、ドイツとの戦争が始まると対敵協力を防止するという名目で中央アジアやシベリアに強制移住させられたが、ヴォルフ自身はそうした悲運とは無縁だった。それどころか、将来の出世を予兆するかのよう、彼は戦争末期にスターリンに忠実なウルブリヒト・グループの一員に選ばれ、ソ連占領地区で共産主義勢力を拡大するためにドイツへ送り込まれた。そしてプロパガンダ活動に従事する一方、ソ連占領地区のSPDを飲み込む形で併合して創設された社会主義統一党でソ連人でありながら最初の党員にもなったのである。これらの点にはその後のヴォルフに一貫する筋金入りの共産主義者としての顔が窺えるといえよう。

ソ連によるドイツ占領からDDR建国、そしてシュタージ創設に至る目まぐ

るしく情勢が変転する時期は、戦争による荒廃に対処するためにイデオロギー的忠誠や理論的能力よりは実務的才覚が必要とされた時期でもあった。30歳前後の若いヴォルフが伶俐で合理的な性格のゆえに頭角を現したのにはそうした時代的背景が存在したのである。東ドイツで主に活動することになったことがソ連国籍を放棄してドイツ人に戻る決断をさせたと推察されるが、彼が一時期ソ連人でもあった事実は、東ドイツでのキャリアの面で重要な要素になったことは想像に難くない。彼は建国間もない東ドイツで対外諜報活動の責任ある地位に抜擢されたが、シュタージがソ連のチェカをモデルにしており、そこで元ソ連人のヴォルフが速いスピードで昇進したことは、東ドイツがソ連の傀儡国家だったことを物語っているといえよう。

ミールケを長官に迎えて自己増殖していったシュタージの内部でナンバー2の最高幹部としてヴォルフは辣腕をふるい、巨大なスパイ組織を作り上げた。そして西ドイツを中心に多数のスパイを西側に送り込み、広範なスパイ網を構築するのに成功した。彼が「顔のない男」として恐れられたのはそのためである。実際、スパイのリーダーでありながら顔すら知られていないということはそれだけガードが堅かったことを示しており、東ドイツに文字通り水も漏らさぬ堅固な組織が作り上げられていたことを証明している。また、そうした組織が存在したことは、東西ドイツを最前線とするヨーロッパでの冷戦体制が平和共存の段階に入っても緊張に満ち、表面上の平和状態の裏側では熾烈なスパイ戦争が繰り広げられていたことを示唆している。その意味で、スパイ組織を率いていたヴォルフは冷戦の生き証人でもあり、ユダヤ系、共産主義者に並ぶスパイとしての第3の顔がここにあるといえよう。

ブランド首相の側近にギョームを送り込んだのはもとより、NATO本部や対抗組織の連邦情報庁にもスパイを潜り込ませたことに見られるように、ヴォルフは大きな功績をあげ、その功勞によっていくつもの勲章を授与された。けれども、1980年代になりソ連でゴルバチョフが登場するとともに、東ドイツの経済的・政治的停滞が顕著になると、目先の利くヴォルフはホーネッカーやミールケから距離を置きはじめた。1986年に彼がシュタージから離れたのはそうし

た方向転換を意味していたと考えられる。彼はDDRの政治中枢に身を置いていただけに、DDRの行き詰まりをいち早く察知できたのであろう。この点で、彼の転身は盤石に見えたDDR体制の瓦解の先触れだったとも解釈できよう。

もちろん、スパイ組織を率いていたヴォルフが改革派にシンパシーを示しても、それを真に受ける人はほとんどいなかった。政治的自由を圧殺したシュタージはDDR市民から恐れられたが、そのトップに座っていた人物が改革派として振る舞い、信用を得るには大きな限界があったのである。ザイルスはヴォルフを「ヤー、アーバーのマイスター」だったと評しているが、これをここで文脈に置き直せば、基本線でDDR体制を承認しつつ、少しばかりは改革を唱えるという行動パターンになるといえよう。

改革派としての彼のポーズに限界があったばかりではない。統一に向かううねりは彼を追い越し、沈んでいくDDR体制から距離をとってはいたものの、彼もまた苦境に追い込まれたのである。DDRスパイのボスだったヴォルフにはドイツ統一時に逮捕状が出されたが、そのためにヴォルフは国外逃亡せざるを得なくなった。しかし逃れたソ連でも安住できず、行き場を失って帰国した彼は刑事被告人として法廷に立たされたのである。ホーネッカー、クレンツ、ケスラーなどDDR最高幹部の裁判は見せしめのショーだったという指摘があり、国境警備兵に対するそれでは報復に主眼があったとも批判されるが、それに一理があるとした場合でも、シュタージの最高幹部として抑圧体制の頂点にいた以上、ヴォルフが統一したドイツで普通の市民として自由を享受することはやはり許されなかったであろう。幾人ものDDR幹部が刑務所に収監されたのに、被告席に立ったにもかかわらずヴォルフが結果的に自由であり続けた理由は、その意味でなお詳しい検討が必要だと思われる。いずれにせよ、この問題は統一したドイツがナチスに続く「第2の全体主義」とも呼ばれるDDRでの人権抑圧の過去にどう向き合おうとしているかを確かめるときの要点であり、ヴォルフの例はDDR幹部のすべてが有罪判決を受けて服役した訳ではないことを如実に示しているといえよう。そしてこれをヴォルフの顔の問題に引き寄せれば、改革派への括弧づきの転身が見られるものの、DDRの市民に沈

黙を強いた抑圧体制の担い手としての顔が見えてくるのである。

以上のように、ドイツ現代史を背景にして「顔のない男」マークス・ヴォルフにはユダヤ系、共産主義者、スパイ、抑圧の担い手という相互に関連する4つの顔が認められる。それらのいずれが彼に強いられ、どれが自ら選びとったものを問うことは忽せにできない問題ではあるが、ここでの関心はそこにはない。むしろドイツ現代史の展開が一人の人間にいくつもの顔を与えた事実にはここでは注目しておきたいと思うのである。

ヴォルフにいくつもの顔があることは、当然の帰結として、彼に対する異なった評価をもたらしている。このことの一部は、ヴォルフの訃報がDDR関係者の間に対照的な反応を生み出したことでも確かめられる。プロテスタント牧師としてDDR体制に抵抗を続け、薬物によりシュタージに殺害されそうになった経験のあるR.エツベルマンは現在CDU所属の連邦議会議員を務めているが、彼はヴォルフを「アパラートの頂点の人物」、「立身出世を遂げた人」であり、「SEDの支配を長引かせるのに尽力した」とした上で、彼の死に悲しみを感じないと言い切っている。一方、DDR民主化運動の出身で現在はシュタージ文書管理特別代表である同盟90/緑の党所属のM.ビルトラーはヴォルフを「無批判に服従したエーリヒ・ミールケに並ぶシュタージの第2の人物」だと位置付け、「抑圧と迫害に対する共同責任を告白しないまま世を去った」と述べて批判的な眼差しを投げかけている。さらにビルトラーの前任者であるだけでなく、やはりDDRの牧師として民主化運動にかかわったJ.ガウクも発言している。しかし彼の場合は幾分穏やかであり、「高い知性がありながら独裁に奉仕した」点で「悲劇的な人物」だったとヴォルフを評している。これらが市民運動の側に立った代表的な人々の反応であり、それ以外の民主化運動の関係者の何人かはヴォルフの死について沈黙を守っていると11月9日付『ネット新聞』は伝えている。

他方、SEDの後継政党である左翼党の党首L.ビスキィは、訃報に接して直ちに声明を発表した。そのなかでビスキィはヴォルフの「知性、開放性、党の根本的革新に対する支援は多くの人の記憶に残るだろう」と敬意を表すると同時

に、「ヴォルフはナチ・レジームに対する闘争者であり、シュタージの偵察部門の責任者、さらには著述家だった」としたうえで、「彼はもう一つのより公正なドイツへの希望を抱きながら、他面で明確に非民主的な構造、社会主義の名による政治権力の乱用とともに担った」という二面性のゆえに「矛盾に満ちた人物」だったとして、批判にも弁護にも傾かないバランスに配慮した言い方をしている。これに対し、同じ左翼党に属すかつてのDDR首相H.モドロウはもっと明快にヴォルフへのシンパシーを表明している。すなわち、モドロウは最良の友を失ったと語り、「赤軍とともにファシズムに対して戦った、ソ連在住の若いドイツ人亡命者の一人」だったことを強調して、その功績を評価しているのである。

このようにヴォルフについての見方は真つ二つに分かれているが、その分岐はDDRをどのように見るかの対立を反映している。より正確にいうなら、DDRで支配権力の側か、シュタージに抑圧された側か、そのいずれの側で生きてきたかというそれぞれの人生の軌跡がヴォルフの評価でも火花を散らしているというべきであろう。その意味で、DDRについての見方が収斂することが予想しにくい以上、他界したヴォルフについても毀誉褒貶は今後も避けられそうにないと考えられるのである。

7. ヴォルフとビアマン

ところで、ヴォルフが死去してから1週間も経たない11月15日にW.ビアマンが70歳の誕生日を迎えた。ビアマンもDDRに深い関わりをもつ人物であり、しかもヴォルフとは正反対の位置に立っているので、簡単に二人の足跡を対比してみよう。

ビアマンの誕生日である11月15日付『ヴェルト』紙は彼に寄せられた祝辞を集めて掲載した。そしてそのトップにはメルケル首相のそれが掲げられた。既に触れたように、1986年にシュタージを離れたあとのヴォルフはビアマンの国籍剥奪に批判的な見解を表明したが、その事件が起きたのは1976年11月のこと

だった。すなわち、SED中央委員会政治局は同月16日にビアマンの国籍を剥奪し国外追放する決定を行ったのであり、したがってビアマンの70回目の誕生日は一日違いで国籍剥奪30周年と重なっている。そうした事実を念頭に置いて東ドイツ出身のメルケルは若かったころを回想しつつ、「DDR時代に私はあなたの歌をただテープでだけ知っていた」が、「あなたの音楽、あなたのテキストはDDRの不法体制を暴くのに貢献した」と賛辞を贈っている。また同時に彼女は、「当時DDRで成人として暮らしていた者は誰でも1976年11月のケルンでのあなたのコンサート後の日々を覚えていることでしょう」と前置きした上で、「あなたの公正な姿勢のゆえに生じたあなたの国籍剥奪は、多くの市民を奮い立たせたDDRの歴史の転換点を印しているといっても誇張ではないと私は信じます」と述べ、事件の重要性を強調している。

首相の座にある政治家が、著名とはいえ市井の歌手に誕生日の祝辞を送るのは、ドイツでもやはり異例のことであろう。そこにはビアマンがDDR反体制派のシンボルの存在だった事実だけでなく、首相が東ドイツの出身であるという事情が働いているように思われる。メルケルはDDR末期に結成された市民運動組織「民主主義の出発」に参加し、DDR最後の首相デメジエールに認められて政府の末席に名を連ねた後、コールによって大臣に抜擢された。したがって、彼女には民主化運動の出身という経歴があり、DDR反対派という点でビアマンに通じるところがある。その意味では彼女がビアマンに率直な好感を抱いていたとしても少しも不思議ではないであろう。しかし、彼女は運動の中心的人物ではなく、むしろ周辺に位置していたことを考えると、ビアマンに祝辞を贈り、自分を重ねあわせることで、DDR反体制派を政治的キャリアの原点とする自分をアピールしたい思惑があるのも否定できないように思われる。このように推測するのは、ルターによる宗教改革の故地ヴィッテンベルクの牧師としてDDR反体制派を貫き、広く尊敬を集めているF.シヨルレマーなどの祝辞にメルケルのそれが並んでいるからである。

いずれにせよ、ヴォルフの場合は毀誉褒貶が避けられず、その訃報が厳しい批判や冷やかな黙殺を招いたことと対比すると、ビアマンには批判的言辞は

見当たらず、もっぱら称賛の声だけが響いているのが際立ったコントラストをなしている。けれども、前者が1923年、後者が1936年という生年の違いを除くと、両者には実は注目すべき共通点が見出せる。既述のようにヴォルフはユダヤ系で父親が共産党員だったが、ハンブルク生まれのピアマンもユダヤ系の父親をもち、しかも労働者だった父親がやはり共産党員だったからである。ヴォルフの父は家族とともにソ連に亡命したが、ピアマンの父親はドイツにとどまり、アウシュヴィッツで殺害された。このようにユダヤ系と共産主義というナチスが憎悪した大敵に二人は出生とともに固く結び付けられていたのであり、亡命と死亡という違いはあるにせよ、ナチ支配が苦難を強い、運命を大きく左右したという点で両者は共通している。それだけではない。ソ連人になった前者は共産主義者としてドイツに戻り、東ドイツの社会主義建設を中枢で担うことになったが、ピアマンもやはり共産主義者として17歳のときに進んで西ドイツから東ドイツに移り、社会主義建設に協力しようとしたのである。西ドイツから東ドイツに移る市民は少なく、メルケルの父親はプロテスタントの牧師として社会主義の圧政に苦しむ人々を宗教面で援助するために東ドイツに移住した数少ない西ドイツ市民の一人だが、ヴォルフとピアマンは共産主義者としてそれぞれソ連と西ドイツから社会主義建設の理想に燃えて東ドイツにやってきたのである。

しかし共通面はここまでである。その後、前者がエリートとして昇進の階段を駆け登り、スパイのトップとしてDDRを守ったのに対し、後者は「現実に存在する社会主義」に対する懐疑を強め、体制批判の歌を作るようになったのである。そのためピアマンに対してSEDは1961年に作品の公演を禁止する措置をとり、同年に彼が創設したベルリン労働者・学生劇場も1963年に閉鎖された。こうして苦境に立たされながらもピアマンは創作を続け、1964年には社会主義ドイツ学生同盟 (SDS) の招待による西ドイツへの公演旅行にもでかけた。しかし1965年に彼の最初のレコードが西ドイツで出た後、東ドイツ当局はピアマンに対して公演と出版を禁止する措置をとった。これに対抗してピアマンは以後12年間自宅で歌い、その住所であるショゼー通り131番地はピアマンの歌

を聞ける場所になっただけでなく、彼の作品名としても有名になった。また彼の歌はテープにとられ、監視網をくぐって西側に持ち出されたあと、そこでレコードとして製作されて売りさばかれる一方、彼の著作が西ドイツで出版されたりした。こうして彼は東ドイツの反体制派のシンボリック的存在になったが、まさにそれゆえに当局にとって彼は要注意人物であり、シュタージによって監視される結果になった。誰がシュタージに協力して彼を監視していたかは最近まで不明だったが、2004年に近所に住む友人だったことが特定された。こうしてビアマンの動静を探り、タイミングをうかがった末、ビアマンが西ドイツに公演旅行のため東ドイツを離れた機会に当局は一時的に国籍を剥奪し、強権によって帰国を不可能にしたのである。この措置に対しては作家・芸術家を中心にDDRでそれまでには見られなかった抗議運動が巻き起こった。メルケルが祝辞の中で「多くの市民を奮い立たせたDDRの歴史の転換点」と呼んでいるのは恐らくこのことを指している。ビアマンの国籍剥奪に起因するこの抗議行動には、しかし逮捕や国外追放の波が続いた。例えばハイネ賞やペトラルカ賞などをそれまでに受賞していた作家のS.キルシュは反対署名運動に加わり、1977年8月に国外追放された。またR.ハーヴェマンと親交のあったJ.フックスは抗議行動を「反国家的扇動」と認定されてシュタージのホーエンシェーンハウゼン拘置所に9カ月間収容された後、キルシュと同じ1977年8月に国外追放の処分を受けた。『暗号名叙情詩』（山下公子訳 草思社 1992年）などの邦訳で知られるR.クンツェが追放されたのは1977年4月のことである。ともあれ、ビアマンは国籍剥奪の結果、やむなく出生地であるハンブルクに居を構えた。そしてそこを本拠にして歌手としての活動を続けながら、1990年のドイツ統一を迎えたのである。この年、彼はヴォルフが拠点としていたシュタージ本部の占拠にも参加している。

このように出発点に共通面があるものの、DDRを守護しようとしたヴォルフとは反対にビアマンはDDR反体制派としての立場を一貫させ、結果的に二人は対極的な位置に立つことになった。この二つの人生の航跡を照らし合わせれば、ヴォルフの場合、上記の4つの顔に一直線の連続性や必然性があつたの

ではないことが推し量れよう。ユダヤ系、共産主義者、スパイのリーダー、抑圧体制の担い手というヴォルフの4つの顔は、ピアマンの生涯に視点を据えると、決して不可分に結合していたわけではなく、外したり別の顔をつけることが不可能ではなかったことが分かるからである。

8. 終わりに

80年以上にわたって波乱に満ちたドイツ現代史を生き抜いたヴォルフは、多くの秘密を抱え、肝心の事柄には沈黙したまま世を去った。11月25日にはベルリンのフリードリヒスフェルト中央墓地にある社会主義者記念施設で埋葬式があり、モドロウ元DDR首相、ビスキエ左翼党党首、シュトレレッツ元DDR国家人民軍総司令官、ヴェクヴェルト元DDR芸術アカデミー総裁などが列席した。最初に弔辞を読んだのはコテネフ・ロシア大使である。S.ヴァイラントによれば、彼は「ドイツは大事な息子の一人を失い、ロシアはドイツの最良の友の一人を失った」と「極めて温かい言葉」で弔意を表したという。そのため、彼のその弔辞はもとより、出席自体がロシアの人権状況とも絡んで批判を呼ぶ結果になったが、彼があえてそうした行動をとったのは、一時期はロシア人だったヴォルフがパーフェクトにロシア語を話し、ロシア料理を好み、そして部下のスパイが集めた情報を兄弟国ソ連に渡していた過去があったからである。

埋葬の式典にはこれらの人物のほかにも多数のDDR元幹部たちが集い、ヴォルフに最後の別れを告げた。そのため、式典はさながら「没落した共和国のためのノスタルジックな国家行事」のような観を呈したという。けれども1000人以上が式典に参列し、その中には多数のシュタージ関係者が含まれていたにもかかわらず、その場でシュタージの犯罪に関しては一言も触れられなかった。それは死せる者にとってだけでなく、残された者にとっても依然としてタブーでありつづけているからにほかならない。

けれども、奇しくも埋葬式の当日に現職のケーラー大統領が連邦大蔵省に勤

務していた当時からシュタージのスパイによって監視されていた事実が『シェピーゲル』によって暴露されたばかりであり、主要全国紙でも一斉に報じられた。これに類した新事実に関するニュースはシュタージが消滅した今も絶えない。10月4日には第6立法期（1969年－1972年）の33人の連邦議会議員がシュタージによって監視されており、例えばSPDの元党首B.エンゲホルムについてエルトマンという暗号名で監視報告が作成されていたことが明らかにされた。さらに11月14日にはケーラー大統領がベルリンにあるシュタージのホーエンシェーンハウゼン拘置施設を訪れ、「DDRの不法が何を意味するかを忘れてはならない」と国民に向かって説く一方、これを報じた翌日の主要紙では、例えば『フランクフルター・アルゲマイネ』が「犠牲者の苦しみは今なお続く」との見出しで、「SED国家は17年前に崩壊したが、党の名で犯された不法は癒えていない」として大量の犠牲者の存在に光を当てたばかりである。これらの事実を考慮すると、シュタージ文書法に基づいて個人に関する情報ファイルの閲覧などが行われ、またシュタージ文書管理機関の手によってDDR体制の暗部の解明が進められているとしても、依然として深層にまでは及んでいないだけに、式典の参加者全員の重い沈黙はますます不気味に映り、深い闇の存在を感じさせないではおかないのである。

参考文献・参照記事（記事は署名入りのもののみ）

Lothar Bisky, Zum Tode von Markus Wolf, Presseerklärungen der Linkspartei vom 9.

11. 2006.

Karl-Heinz Baum, Deckname "Leder", in: Frankfurter Rundschau vom 5. 10. 2006.

Ders., Gestorben am 9. November, in: Frankfurter Rundschau vom 10. 11. 2006.

Constanze von Bullion, Wehmütige russische Weisen, in: Süddeutsche Zeitung vom 27.

11. 2006.

Christine Claussen, Sein Metier war der Verrat, in: Stern, Nr.47, 2006.

Jens Gieseke, Die DDR-Staatssicherheit: Schild und Schwert der Partei, Bonn 2000.

Hans Halter, Listig, skrupellos und ein Freund der Frauen, in: Der Spiegel vom 9. 11.

2006.

Ders., Russen ehren ihren Mann in Deutschland, in: Der Spiegel vom 25. 11. 2006.

Jochen Hieber, Der Poet, der den Staat stürzte, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 15. 11. 2006.

Lew Hohmann, Spioagechef Markus Wolf, MDR vom 9/16.12.2003.

Sven Felix Kellerhoff, Engholm hieß bei der Stasi "Erdmann", in: Die Welt vom 4. 10. 2006.

Ders., Der Mann, der Günter Guillaume auf Willy Brandt ansetzte, in: Die Welt vom 9. 11. 2006.

Angela Merkel, Der klügste und der allerbeste deutsche Alfa-Wolf, in: Die Welt vom 15. 11. 2006.

Klaus Peter Müller, Die Opfer leiden immer noch, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 15. 11. 2006.

Helmut Müller-Enbergs, Was wissen wir über die DDR-Spionage?, in: ders. u. Georg Herbstritt, hrsg., Das Gesicht dem Westen zu, Bremen 2003.

Helmut Müller-Enbergs/Jan Wielgoß/Dieter Hoffmann, hrsg., Wer war wer in der DDR, Berlin 2000.

Friedrich Schorlemmer, Seine Lieder und Gedichte halfen mir zu überleben, in: Die Welt vom 15. 11. 2006.

Jutta Schütz, Köhler fordert mehr Verständnis für Stasi-Opfer, in: Netzeitung vom 14. 11. 2006.

Dies., Nelken und Rosen für den Spion, in: Stern vom 25. 11. 2006.

Christoph Seils, Ein Mann mit vielen Gesichtern, in: Die Zeit vom 9. 11. 2006.

Carl Thalmann und Robert Vernier, Vom Top-Spion zum Talkshow-Gast, in: Focus vom 9. 11. 2006.

Mark R. Thompson and Ludmilla Lennartz, The Making of Chancellor Merkel, in: German Politics, Vol. 15, No. 1, 2006.

Axel Vombäumen, Im Dienste seiner Identität, in: Der Tagesspiegel vom 10. 11. 2006.

Severin Weiland, CDU-Politiker attackiert russischen Botschafter, in: Der Spiegel vom 29. 11. 2006.

Willi Winkler, Verfluchte Menschheitsretterei, in: Süddeutsche Zeitung vom 15. 11. 2006.

Markus Wolf, Spionagechef im geheimen Krieg, München 2003.

Ders., Man without a Face, New York 1997.

Peter Wolter, Kein Mann ohne Gesicht, in: Junge Welt vom 10. 11. 2006.

ヘルマン・ウェーバー、齋藤哲・星乃治彦訳『ドイツ民主共和国史』日本経済評論社、

1991年。

ガイド・クノッブ、永野秀和・赤根洋子訳『トップ・スパイ』文芸春秋、1995年。

マンフレート・フランク「3つの11月9日」『思想』1993年10月号。

桑原草子『シュタージの犯罪』中央公論社、1993年。

関根伸一郎『ドイツの秘密情報機関』講談社現代新書、1995年。